

日本スポーツ社会学会会報

Vol.45

Sport Sociology

目次

・日本スポーツ社会学会第16回大会プログラム	2
・事務局からのお知らせ	10
・学会・研究会報告	11
・各種学会・研究会のご案内	23

日本スポーツ社会学会
Japan Society of Sport Sociology

広報委員会2007年 3月

第 16 回 日本スポーツ社会学会 プログラム

会場 金沢大学角間キャンパス

日程

..... 3月25日(日)

後期理事会(2006) 15時00分~17時00分 <法経棟3F 第2会議室>

..... 3月26日(月)

新旧合同理事会 10時00分~12時00分

受付 11時30分~ <A202>

一般発表 12時30分~14時30分

会場 A・A203

座長：清水諭（筑波大学）

26 A1 12:30~ 浜田 幸絵（東京経済大学大学院コミュニケーション学研究科）

戦前日本における社会的熱狂の対象としての「オリンピック」の形成過程

26 A2 13:00~ 王 篠卉（関西大学）

北京オリンピックにおける「市民参加」政策に関する一考察 - 「ボート競技・コックス選抜」イベントを中心に -

26 A3 13:30~ 白石 義郎（久留米大学）

オリンピック招致運動の都市効果 - 福岡市長の戦略

26 A4 14:00~ 金子 史弥（一橋大学大学院社会学研究科）

スポーツイベント招致と都市 - UK の事例研究 -

会場 B・L204

座長：菊幸一（筑波大学）

26 B1 12:30~ 原 祐一（東京学芸大学）

潜在的機能と潜在的カリキュラム スポーツと教育における「かくれた作用」

の言説空間

2 6 B 2 13:00~ 鈴木 聡 (東京学芸大学附属世田谷小学校)
小学校教師の職業的社会的化における体育科授業研究が及ぼす影響に関する研究・ライフヒストリー研究を視点として・

2 6 B 3 13:30~ 野村 圭 (東京学芸大学)
体育教師の「脳みそ」は本当に「筋肉」なのか? ~ラベリングと学校文化の近代性~

2 6 B 4 14:00~ 中澤 篤史 (東京大学大学院)
運動部活動における教師・生徒関係の記述的研究 都内公立中学校ラグビー部のフィールドワーク

会場 C・L205

座長：松田恵示 (東京学芸大学)

2 6 C 1 12:30~ 服部 直 (龍谷大学大学院社会学研究科)
型と身体：能楽と武道の比較において

2 6 C 2 13:00~ 森山 達矢 (純真女子短期大学)
武道における精神性と身体感覚

2 6 C 3 13:30~ 小谷 寛二 (福山平成大学)
共振する社会的身体 その

2 6 C 4 14:00~ 野村 徹 (東京学芸大学大学院)
メディアにみられる子どもの身体観

会場 D・L206

座長：森川貞夫 (日本体育大学)

2 6 D 1 12:30~ 小坂 美保 (早稲田大学スポーツ科学学術院)
遊歩空間としての公園に関する研究・日比谷公園を手がかりに・

2 6 D 2 13:00~ 角田 聡美 (福山平成大学)
1910-1920年代における女子のスポーツ活動とその意味・茨城県立土浦高等女学校を事例にして・

2 6 D 3 13:30~ 高尾 将幸 (筑波大学大学院)
戦時下における“体位低下問題”とスポーツ空間・名古屋市公園事業を事例として・

2 6 D 4 14:00~ 中山 健 (上智大学文学部 保健体育研究室)
中高年者の身体活動における社会的ネットワーク機能の差異に関する研究

会場 E・L 313

座長：西山哲郎 (中京大学)

2 6 E 1 12:30~ 小竹 瞬 (奈良教育大学大学院)
ストリートダンスの世界

2 6 E 2 13:00~ Wu, Sheng-Chi (National Taiwan Normal University)
B-Boy for life? The Evolutional Track of Street Dance in Taiwan

2 6 E 3 13:30~ Hung -Yu LIU (Department of Leisure Management Ming
Hsin University of Science and Technology Taiwan)
The Relationship across the Taiwan Strait and the Bidding of Mega-events in
Taiwan-a Strategic Relations Perspective

会場 F・L 302

座長：千葉直樹 (浅井学園大学短期大学部)

2 6 F 1 12:30~ 林 伯修 (台湾師範大学)
「台湾大学野球とグローバル化」に関する調査研究

2 6 F 2 13:00~ Chen An Chuang (National Taiwan Normal University)
Exploration to the factors of decrease in fans attendance in CPBL 17th in Taiwan

2 6 F 3 13:30~ Toshiyuki Yamanokuchi (National Taiwan Normal
University)
Three-concerned Relationship:Reconsideration on the Football Association in Taiwan

研究委員会企画

14時40分~17時10分 <A102>

課題研究「スポーツの空間/空間のスポーツ 戦前期の都市と国家」

報告1 石坂友司 (筑波大学)

スポーツが作り出す都市空間 —プロジェクトとしての東京オリンピック—

報告2 関直規 (弘前学院大学)

戦間期の社会体育行政と都市空間

報告3 吉原直樹(東北大学)
戦間期仙台の余暇空間

総会 17時20分~18時20分 <A102>

懇親会 18時30分~20時00分 <生協 北福利食堂 1F>

..... 3月27日(火)

一般発表 9時00分~10時30分

会場A・A203

座長;坂上康博(福島大学)

27 A1 9:00~ 林 伯修 (台湾師範大学運動與休閒管理研究所)
台湾甲組棒球に関する研究

27 A2 9:30~ Li-Wei Hsu (National Taiwan Normal University)
Our memory, Our baseball, the Taiwanese Collective Identity

27 A3 10:00~ Liao Yung (National Taiwan Normal University)
A Sports Hero's birth -- The Deconstructing of Chien-Ming Wang Phenomenon

会場B・L204

座長:高橋義雄(名古屋大学)

27 B1 9:00~ Guo, Ya-Ting (National Taiwan Normal University)
Study of the marketing of Keelung Jung Yuan Festival (基隆中元祭)

27 B2 9:30~ Wang lin-kai (National Taiwan Normal University)
The Research on participant motivations of consumer、consumer behavior and
consumer satisfaction in fitness center. A case study of Taipei city Betiou sport center

27 B3 10:00~ Jia-Jahng Guo (National Taiwan Normal University)
A Research on social development of the soccer participant in Taiwan

会場C・L205

座長:平井肇(滋賀大学)

27 C1 9:00~ Cheng-Hsiu,Tsai (National Taiwan Normal University)
A study in role conflict of semi-professional student players Students in Super
Basketball League and NTNU basketball team as a example

2 7 C 2 9 : 30 ~ 朱 文 増 (台湾師範大学スポーツとレジャー経営研究科)
Study on Current Status of the Retired Professional Baseball Players in Taiwan
--With a Focus on the Trace Investigation of Retired Players 台湾プロ野球選手の
引退後の現状についての研究 ・引退した選手の追跡調査を中心として

2 7 C 3 10 : 00 ~ Tzeng Chien-chun (National Taiwan Normal University)
The comparison of the developments of therapeutic riding between Taiwan and
Canada. -The cases of Northern Taiwan and Western Canada

会場 D ・ L206

座長：リー・トンプソン (早稲田大学)

2 7 D 1 9 : 00 ~ Jun-hao Hu (National Taiwan Normal University
Graduate Institute of Sports and Leisure Management)

The Research on Super Basketball League Players' Values of Games

2 7 D 2 9 : 30 ~ Chen-Wei Lo (National Taiwan Normal University、
Taiwan)

The Content Analysis of Gender of News Reporters in Sports Coverage -An Example
of 2006 DOHA Asia Games

2 7 D 3 10 : 00 ~ Chia-Pei Huang (National Taiwan Normal University)
A Study on Media Relations Strategy of the Sport Brand - take adidas originals in
Taiwan for example

会場 E ・ L 313

座長：橋本純一 (信州大学)

2 7 E 1 9 : 00 ~ 岡村 正史 (大阪大学大学院人間科学研究科)

大衆文化としてのプロレスはいつ終焉したのか。

2 7 E 2 9 : 30 ~ 清水 泰生 ((社) 日本マスターズ陸上競技連合)
言語学からみたスポーツ実況中継

会場 F ・ L 302

座長：藤田紀昭 (日本福祉大学)

2 7 F 1 9 : 00 ~ 森 政晴 (駒澤大学大学院)

スポーツ<ボランティア>はボランティアか -ボランティア論からのアプ
ローチと定義の再考-

2 7 F 2 9 : 30 ~ 後藤 貴浩 (熊本大学)

生活構造から捉える障害者とスポーツ

国際交流委員会企画 10時40分～12時40分 <A102>

国際シンポジウム

「アジアにおけるグローバリゼーションとスポーツ

Globalization and Sports in Asia」

1) スティーブ ジャクソン (オタゴ大学 ニュージーランド)

グローバリゼーションとスポーツ：アジアの境界内、そしてアジアを越えての現在と未来の研究領域

2) シン イハン (サウスカロライナ大学 アメリカ)

プロスポーツ競技および競技者の興隆と没落：日本における大相撲の事例を通して

3) 黄 順姫 (筑波大学 日本)

2006年のワールドカップサッカー、多文化的サポーターの空間、ディアスポラ

実行委員会企画 13時20分～14時20分 <A102>

特別講演「旧制高等学校のスポーツ活動研究」

大久保英哲 (金沢大学)

一般発表 14時30分～16時00分

会場 A・A203

座長：岡田桂 (関東学院大学)

27 A1 14:30～ 藪 耕太郎 (立命館大学大学院)

海外への武道の普及に関する一考察 -1910年代のパラグアイにおける柔術の受容を中心に-

27 A2 15:00～ Li Ho-Yu (National Taiwan Normal University)

Night club culture in Taipei

27 A3 15:30～ 坂本幹 (筑波大学大学院人間総合科学研究科)

第3世界における「パブリック・カルチャー」論の射程 A.アパデュライの

「インド・クリケットの脱植民地化」を中心にして

会場 B・L204

座長：高橋豪仁（奈良教育大学）

27 B 1 14:30～ 宮坂 雄悟（東京学芸大学研究員）
遊び行為における役割の「重複性」に関する研究

27 B 2 15:00～ 松田 恵示 東京学芸大学
“Wii 現象”とは何か？-ヴァーチャルスポーツのハイブリッド化の意味について-

27 B 3 15:30～ Chang Hung Chi（National Taiwan Normal University）
The Game Generation in Taiwan: The Past, Present, and Future

会場 C・L205

座長：佐伯年詩雄（筑波大学）

27 C 1 14:30～ 大沼 義彦（北海道大学大学院教育学研究科）
米国プロスポーツ研究における経験的・理論的パースペクティブ

27 C 2 15:00～ 荒川 和民（スポーツライター）
内海和雄氏の理論についての考察

27 C 3 15:30～ Lee Shane chung（National Taiwan Normal University）
Looking insight the phenomenon of Wang with the theory of cycle of culture

会場 D・L206

座長：松村和則（筑波大学）

27 D 1 14:30～ Yu-Jen Chen（Graduate Institute of Sports and Leisure Management）

The Research of Leisure-related Policies for The Elderly in Taiwan

27 D 2 15:00～ 笹生 心太（一橋大学大学院社会学研究科）
ポウリングブームに関する諸条件の考察

会場 E・L 313

座長：東元春夫（京都女子大学）

27 E 1 14:30～ 池端 宏之（早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程）

帰化選手に描かれる日本人の「境界」～サッカーでの言説を事例として～

27 E 2 15:00～ 千葉 直樹 (浅井学園大学短期大学部)
Jリーグにみる在日コリアンの民族アイデンティティ

27 E 3 15:30～ Wang Szu Hong (National Taiwan Normal University)
The cultural Implications of Sports movie in Native Taiwanese - With movie (My Football Summer) for example-

会場 F・L 302

座長：山本教人 (九州大学)

27 F 1 14:30～ 了海 諭 (東海大学)
大相撲における女人禁制の研究 5・平成 17・18 年 9 月東京場所観戦者の比較・

27 F 2 15:00～ 生沼 芳弘 (東海大学)
大相撲における女人禁制の研究 6・平成 18 年 (2006) 九月東京場所の観客意識調査・

事務局からのお知らせ

日本学術会議主催で、以下のような催しが開かれました。学会をめぐる社会的環境は、大きな変化の中にあります。内容等につきましては、追って会報にてお知らせしていきたいと思えます。

シンポジウム

これからの日本の学協会のありかた -学協会を巡る変化とその対応-

主催：日本学術会議 科学者委員会 学協会の機能強化方策検討等分委会

日時：平成19年3月16日（金）13：30～16：30

場所：日本学術会議 6C（1）～（3）会議室（6F）

プログラム：

基調講演「これからの日本学協会のありかた」

講演 「公益法人制度改革について」

報告 「学協会の機能強化についての調査・研究」中間報告

講演 「科学技術の振興と学協会について」

講演 「日本科学連合の発足について」

講演会の報告

関東スポーツ社会学研究会と東京学芸大学の共催で、去る3月6日に、イギリス・ラフバラ大学の Mike Waring 助教授による講演会が開かれました。グラウンディッド・セオリーによるスポーツ研究の事例として大変興味深いものでした。以下に、その内容を掲載いたします。

青少年の身体的活動への参加の構造化：報酬の正当化

Mike Waring(ラフバラ大学)

概要

13～16歳の青少年の男女に対して行われたインタビューの根拠のある理論分析（Strauss and Corbin, 1990）では、特に青少年の身体的活動への参加に影響を与えた報酬の正当化のプロセスが明らかにされた。「楽しさ」という要素が入り込んだ「社会的プロセス」と「パフォーマンス（および能力）」という2つの主要なプロセスが特定された。「社会的プロセス」を圧倒的に考慮することは、他の人々との共通の経験を促進することである。「パフォーマンス（および能力）」は2つのレベルで存在する。娯楽的なレベルとまじめなレベルである。これらは、仲間や影響力のある他人それぞれによる最小から最大のパフォーマンスの批判および判断を引き起こす状況からの連続に等しい。「社会的プロセス」に関する成功は、友人との「共通の経験」の数とこれらの経験の一貫性に関連している。「共通の経験」は、それを作り上げる行動および活動を強化する。したがって、青少年は、その活動への関わりをより容易に採用し、再び受け入れる。

序論

青少年の身体的活動への参加に影響を与えるプロセスを明らかにするために、13～16歳の青少年の男女29名とその親16名に対して行われたインタビューのデータが根拠のある理論の方法（Strauss and Corbin, 1990; Waring, 2001; 2003）を使用して分析された。分析により、いくつかの主要なプロセス（報酬の正当化、独立心との折り合い、保護、ネットワーク作りの戦略、優先順序の付け直し、空白の戦略）が機会の枠組みの中で特定された。

独立心との折り合い	保護	報酬の正当化	ネットワーク作り
優先順序の付け直し		空白の戦略	

これらの6つのプロセスは相互関係がきわめて強く、個々のプロセスが青少年の身体的活動への参加を完全に決定することはないと明言される。この論文では、これらのプロセスの1つである「報酬の正当化」に焦点を合わせる。

報酬の正当化

身体的活動は、正当な報酬（青少年にとって重要だと感じられるものを強調し

促進するような報酬)が提供されると、すべての青少年に受け入れられる。報酬は身体的活動や状況により異なるが、青少年の身体的活動への参加から得られる「報酬の正当化」に関わるすべての監視代行者(親、仲間、および教師)に一貫している基本的な側面がある。青少年と監視代行者に認識される報酬が肯定的であればあるほど、その活動への参加が維持され拡大される可能性が高い。一方、活動に対して全般的に否定的な認識があると、その活動への参加は、関与する監視代行人の1人または何人かの行動により終結するかなり縮小する。青少年に対する報酬は、必ずしも他の監視人に対する報酬と同じとは限らない。

青少年に対する報酬

青少年に対する報酬は、主に自分の利益となる報酬である。図1は、任意の身体的活動への参加による実際の報酬または期待される報酬の全般的な性質を決定するために、青少年が考える基本的な要因を特定する「報酬の正当化」のプロセスを単純化したものである。2つの主要なプロセスが青少年に対する「報酬」の正当化を要約している。「社会的プロセス」と「パフォーマンス(および能力)」である。これらの基本的なプロセスの両方に関連する「楽しさ」の要素もある。

社会的プロセス

「社会的プロセス」の圧倒的な考慮と根底にある目的は、仲間や家族など、1人または複数の個人との「共通の経験」を促進することである。経験することが身体的または感情的に肯定的か否定的かにかかわらず、目的は青少年が特に仲間や家族と共有して分かち合える経験を得ることである。

肯定的な経験の方が望ましいが、否定的な経験がプロセスを無効にするわけではない。活動の認識された代償は、それが生み出す肯定的な感情により相殺され、否定的な影響は認識された利益により相殺される。経験の共通性は、青少年と身体的活動経験の仲間との間の望ましい絆を助長する。身体的活動を通じた「共通の経験」の促進は、青少年の参加の肯定的な結果であり、これを生成する活動への関わりを発生させる。

共通の経験を通して得られた友情は、2つの形で存在する。1つは「一次的友情」で、もう1つは「二次的友情」である。一次的友情は、青少年が関わっている活動に関係なく存在する友情である。これらの友情は「本当」の友人とともにある。すなわち、彼らは以前の「共通の経験」が深いために、その友人ととても詳しい個人的な情報を進んで交換したがる。これらの友人との接触は、さまざまな状況や活動を含んでいる。「二次的友情」は一次的友情ほどすべてを含むものにはならず、特定の状況や背景の限定された範囲で相互に影響しあう個人とともに発生する。この2つの形の友情は、「共通の経験」を最大限に生かすために青少年の野心が互いを同義化するが、別物のままになる可能性がある。こ

の共通の経験の結果としての「楽しさ」は、青少年の一次のおよび二次的友情を築く同じ状況により作り出される²。その相互関係は双方向のプロセスである。

パフォーマンス（および能力）

青少年が関わっている身体的活動がどんなものであろうと、「パフォーマンス」³と「能力」⁴の程度は、その身体的活動への参加に影響を与える基本的な考慮すべき事柄である。「パフォーマンス（および能力）」は2つのレベルで存在する。「まじめ」なレベルと「娯乐的」なレベルである。

1 一次的友情は、身体的活動への関わりの前またはそれとは別に存在する可能性がある。しかし、この友情は青少年とその一次的友人が同じ身体的活動に関わることにより深められる。

2 2つの次元（まじめなものとしりげないもの）で存在する楽しさは、特定の状況で活動とその身体的および社会的結果を楽しむことである。その相対的な重要性は、青少年が楽しさに持ち込む状況と課題によって決定される。

3 パフォーマンスは、青少年が特定の身体的活動に関連して許容できる標準（許容できるレベルとは、グループの認識された平均と同等かそれ以上のレベルをいう）を行う能力である。

「娯乐的」なレベルでのパフォーマンス（および能力）

「娯乐的」とは、青少年の身体的活動への参加の結果として、「楽しさ」を得ること以外にあらかじめ定められた本質的な目標がない状況をいう⁵。「楽しさ」には、常に「さりげない」と「まじめ」なものという2つの要素がある。ある特定の時間における一方の他方に対する優勢を決定するのは、活動の状況とその活動の参加者である⁶。このような活動は1人で、または友人と行われ、くつろぎ、練習、または形式張らずに組織化された活動となる可能性がある⁷。身体的活動の「娯乐的」な性質は、「まじめ」な要素を保持している場合でも、大部分は「さりげない」「楽しさ」という定義を構成している。このような「楽しさ」の背景や状況は、青少年が参加する活動の幅広い選択をもてる環境（必ずしもすべての活動を行うわけではなく、少なくともこれらの活動を行うことができる）や、青少年が「実験」⁸できるやり方で実証される。この実験は能力のレベルを無視しており、青少年にとって「威嚇的でない」。青少年はこの実験を身体的にも感情的にも自分を攻撃するものとして認識しないからである⁹。その結果、青少年は自分が参加することによって「恥をかかされて」いるようには感じない。肯定的な実験と否定的な実験の区別は、青少年とその仲間のグループによって異なる。しかし、グループ内での青少年の認識された立場や彼らがグループ内ですでに確立した信用（身体的および感情的）は重要な変数である。これらが青少年によりよいものであると認識されている場合、彼らは参加することから否定的な側面より肯定的な側面を引き出す可能性が高いからである。これらの共通の経験に関連する「楽しさ」の概念は重要であるが、青少年

にとってそれにとって代わるものである退屈も同様に重要である。

4 能力はパフォーマンスの追求を満足させるのに役立つ。能力とパフォーマンスは、達成と身体的活動または失敗と身体的不活発の自己達成しつつある予言において表裏一体である。

5 青少年が身体的活動に没頭しているときに絶えず言及する「楽しさ」の概念は、「楽しさ」が陽気なものでおそらくは重要ではないと思う大人の概念とは異なっている。青少年にとって、「楽しさ」は、身体的活動の本質が参加を通して経験でき、その状況で自分が容認できる方法でのみ自我を確立するような楽しみを含んでいる。

6 「さりげない」楽しさと「まじめ」な楽しさは、身体的活動の状況での青少年の楽しさに対する全般的な認識を指す。さりげない楽しさは、青少年の「自我」に挑んだり直面したりしないような状況で存在する。一方、まじめな楽しさは青少年の自我に対する挑戦がかなり大きい状況で存在するが、それは他の目的を達成する手段であるため、容認できる。

7 「くつろぎ」は、活動への関わりが他の事柄とは異なる歓迎すべき休憩となる制約されない参加を指す。

「練習」は、青少年が経験して上達しようとする試みにおいて確立された行動または新しい行動を繰り返し行う状況を指す。

「形式張らずに組織化された活動」は、青少年が特定の時間に即席で作られた会場（運動場など）で正しいルールに従って参加するために自分らで手配する状況を指す。組織化の程度はあるが、全般的な方針は形式張らないことである。

8 実験では、青少年は感情的にも身体的にも否定的な意味合いを予期せずに何かを試すことができる。

9 身体的 – 彼らのパフォーマンスをからかうこと。感情的 – 彼らの自尊心や自己認識を弱めること。

娯楽的なパフォーマンスと相互関係をもつのは、社会的プロセスに関連する「共通の経験」である。共通の経験は、青少年の身体的活動への参加を決定する基本的に重要な要因である。経験を共有することは、青少年にとってのその経験の重要性を増し、その経験をはるかに価値のあるものとするからである。「楽しさ」の要素は、必ずしも参加に必須のものではないが、活動が特定の状況において青少年にとって予測できるものになり、なじみのあるものになるにつれて、時間の経過とともに重要性が増す可能性がある。楽しさの要素が大きくなればなるほど、認識が肯定的になり、青少年がその活動への参加を維持する可能性が高くなる。

青少年によって「娯乐的」と分類される身体的活動は、威嚇的でなく、彼らにパフォーマンスの結果を気にしすぎることなく活動を「やってみる」自由な気持ちを与えるものである。「楽しさ」は、青少年が自分のパフォーマンスの重要

な検視が誰かに行われているような感覚を感じることなく、活動を「やってみる」ことができる状況から得られる。間違いは誰のパフォーマンスでも起こりうることであり、重要なのは青少年へのフィードバックの認識された性質である。1人の場合でもグループ活動の場合でも、ある程度の匿名性は維持する必要がある。これは青少年にとっては必須である。なぜなら、これで彼らは自由という必要な認識が与えられ、実験を続けることができるからである。

はい。リンクではいつでもそうでした。娘が一番下のグループに入っていない限り、喜んで集団スケートに加わっていましたし、トップの1人になるまで娘の話は止みませんでした。(父 - 14歳女子)

「楽しさ」は、パフォーマンスの基準が「まじめ」なものになるといくぶん変化する。「まじめ」な楽しさでは、青少年に対する容認の敷居が高くなる。これはより強い批判を受け入れることだけではなく、心理的にも肉体的にも要求の厳しい状況である。

コーチは私をポジションに入れようとしている。そう思ったら気分が悪くなって、その場を去りました。友だちならそんなことはしません。私たちは対等の立場だから、友だちにはそんな権限がありません。(15歳女子)

これは、友人たちが目標を達成することに向けてそれが有益であると認識しているからである。「ネットボールがもっとうまくなれるように、それも経験してみようと思っている」(15歳女子)。さらに、活動は、自分が何か新しいことを学んでスキルや知識のレパートリーを増やしたり強化したりしていると感じるという点で、青少年にとって興味深いものであるべきである。つまり、興味深いものであれば、選ばれて維持される。「楽しさ」の「まじめ」な要素は、「パフォーマンス(および能力)」と「共通の経験」の圧倒的な性質が「娯乐的」な状況においても存在する。これは「組織化された形式張らない活動」の採用によって典型的に示される。この状況では、身体的活動は、威嚇的でなく偏った判断がなく、実験的な「楽しさ」の概念を構成するために、仲間の中で組織化される。そこには、あからさまな勝ち負けの競争の要素も組み入れられる。この「組織化された形式張らない活動」に関連する結果は、クラブレベルの「組織化された形式的な活動」に関連する結果とはきわめて対照的である。なぜなら、勝つことは大切かもしれないが、それがその経験の性質に必須ではないからである。組織化された形式張らない活動は、能力が限られていて発展途上にある青少年にとって、「娯乐的なパフォーマンス」の楽しいタイプの活動と「まじめなパフォーマンス」の楽しいタイプの活動の間の重要な過渡的経験である。共通の経験が「さりげない」楽しさと関連している一方で、図 6.2 に示すように、パフォーマンス関連の「まじめ」な楽しさとも関連性がある。ここで、「二次的」つまり「活動を通じた」友人は、この「さりげない楽しさ」の定義を身体的活

動の環境によって促進されるものとして採用する可能性がある。

「まじめ」なレベルでのパフォーマンス（および能力）

「パフォーマンス（および能力）」の「娯乐的」な側面の代わりになるものとして、「まじめ」な側面がある。ここで、青少年（および他の監視人）の身体的活動への関わりに対する焦点と結果には、きわめて対照的なものがある。これは論じられた「娯乐的」な価値 10 の多くを組み入れる場合があるが、圧倒的に考慮すべき事柄はよりよいパーフォーマーになることで、青少年が現在経験しているレベルよりも高いレベルである種の典型的な名誉を達成することに焦点が定められている。青少年が身体的活動に関わっているときの仲間と監視人の注意は、彼らが自分のパフォーマンスの能力の程度を特定する手助けとなり、それにより能力に関連する自信の相対的なレベルをもつことになる¹¹。この心理的な要素の重要性を裏付けるものとして、Jambor と Rudisill（1992 年）は、管理の認識された中心は、達成のモチベーションと認識された能力とともに、青少年がスポーツの選択で下す決断の一因となるように思われると述べている（p36）。Nicholls（1984 年）は、青少年は、達成の状況で、高い能力と低い能力がそれぞれ最大限に見えたり最小限に見えたりすると自分が感じる方法でふるまうと信じている。これは、彼らの発達レベルにより異なる自分の能力の解釈による。たとえば、7~9 歳の子供は努力と能力を完全には区別することができない。その結果、彼らは一般的に努力が達成結果の原因となることを期待する。しかし、11~12 歳の青少年は、この 2 つの概念を完全に区別することができる。したがって、報酬の正当化プロセス内のまじめなレベルでのパフォーマンスと能力の側面を考慮に入れると、このような達成状況での彼らのモチベーションが基本的に定義される能力の主観的な基準には、認知発達の要因が介在する。

「クラブ」の環境とそれに関連する「組織化された形式的な活動」内では競争が基準であり、競争は青少年の身体的活動への参加に明らかに密接した誘因となるものである。このプロセスを含む「楽しさ」の概念は、この状況では「娯乐的」なパフォーマンスに関連する概念から変化する¹²。図 1 に示したように、「楽しさ」のレベルを定義する活動の意思決定、実験、および興味深い性質を強調することは、娯乐的なパフォーマンスタイプの活動に関連する圧倒的に「さりげない楽しさ」から著しく変化している。以前は、身体的活動の種類に関連する選択は、「楽しさ」を助長するために幅広いものである必要があった。しかし、組織化されたクラブの構造では、青少年は、この選択がはるかに限定されていて、はるかに厳しい限界があることを受け入れている。しかし、このような制限的な限界内でも、青少年のために、活動の選択はある程度残しておく必要がある。圧倒的に「まじめ」な「楽しさ」のこの新しい定義内での実験の性質は、偏った判断をしない威嚇的でない活動からの逸脱を受け入れないものから、活動のパフォーマンスや能力に関する仲間と特に監視人による判断を受け入れるものへと大きく変わっている。これは、彼らが上達するために「間違い

から学ぶ」(13歳女子)と感じている状況にあるからである。自分も持っているかも持っているだろうと感じる、仲間よりも優れていると認識する能力を維持して向上させることは、青少年(および他の監視人)にとって興味深いものになる。

- 10 何か新しいことを学ぶこと、「共通の経験」、および「楽しさ」
- 11 認識された能力が高ければ高いほど、青少年の自信は大きくなる。
- 12 これは「さりげない」要素と「まじめ」な要素を維持するが、今回は「まじめ」な要素が優勢である。

このような焦点を採用し、競争の目的がはっきりとしている特徴に伴って発生する自分の能力に対し高いイメージをもっている青少年は、「行動の適応パターン」(Roberts, 1993)と呼ばれているものに従事する。この場合、人は興味深く意欲をかきたてる課題の状況に対する努力に焦点を合わせ、その中で、相対的な失敗または困難にもかかわらず、ある期間にわたってその活動を懸命に維持しようとする。青少年(および監視人)のこの「まじめ」な姿勢の結果、彼らは自分に対するさらに感情的だが特に身体的な批判を肯定的に受け入れる。しかし、彼らが自分の能力に関する自分自身の批判の矛盾した解釈に対処できない場合、彼らは自分に対する認識を受け入れる他のもの(ユースクラブ、街を歩くこと、コンピュータゲームなど)へと移る可能性がある。

青少年の自宅、クラブ、学校の互いの位置関係は重要である。これらすべてが同じ地域社会の中で近くにある場合、青少年はクラブへの関わりを維持しながら「二次的」および「一次的」友人とより容易に仲良くやっていける立場にある。しかし、自宅が学校やクラブのどちらかまたは両方から遠い場所にあると、青少年が関わっている「娯乐的」なパフォーマンス活動と「まじめ」なパフォーマンス活動(およびそれに関連する人々)の間に明確な区別が生じる。これには、それぞれの活動をともに行う個人と活動で使用される監視の役割の間の区別も含まれる。

(「州」の) ネットボールには学校の友だちが1人もいません。ダンスにはいるけど、オーケストラにはいませんでした。私の学校に通っている人たちはほとんどレスターカウンティに住んでいるけど、私はここに住んでいるからとても遠いのです。村の友だちのほとんどは、ここから2マイルほどのところにある他の学校に通っています。(15歳女子)

成功

成功は主に青少年自身の利益になり、一般的に彼らによってさまざまな形での自己認識の維持と発達(親や教師の注目が増すことや仲間からさらに受け入れられることなど)として分類される。より具体的には、青少年のパフォーマンスの観点での成功は、身体的活動での能力(実際的能力または認識されたもの)

とそれに伴う競争の達成が上達することを意味する。Roberts (1993 年) が述べたように、スポーツの達成の状況は能力の自我に関連する概念に關与して、青少年は、この概念によりスポーツの状況における競争の達成目標を達成させる。成功はちょっとした自己達成的予言を達成させるので、彼らの認識された能力を維持するために、より多くの練習が必要になり、それを青少年のライフスタイルに組み入れる必要がある¹³。練習を増やすことは身体的活動の能力を達成させることに役立つ、それが自信を高めることにつながる(パフォーマンスが上達し、仲間や、おそらく他の監視人からも認められるため)。これによって活動への参加が維持され、深められるので、継続的な成功を達成する可能性も高まる。練習を増やすことは、それにより多くの時間を費やす必要が生じるなど、他の意味合いももっている。したがって、より多くの組織化が必要とされ、青少年またはその家族が関わっている活動の優先順位の付け直しもおそらく必要となる。

13 これは、利用できる資源と活動に関わることにより達成される「報酬の正当化」に関して、青少年とその監視人により評価する必要がある。

社会的プロセスは、友人との「共通の経験」の数とこれらの経験の一貫性により、青少年によって肯定的または否定的として容易に定量化される。「共通の経験」の達成に成功することは、それを作り出した行動や活動を強化する。したがって、図 1 に示すように、青少年は活動への関わりを進んで継続し、さらに確立する。

青少年が身体的活動においてもっている「楽しさ」と「成功」の程度は、親、青少年、および学校にとって、青少年がある特定の状況以外の他の身体的活動に参加するためのさらなる機会を求める誘因となりうる。これは、一方の端に頻度の増加だけでなく形式的に組織化された身体的活動での競争の水準を上げることも求める有能なパフォーマーである青少年がいる連続体¹⁴に沿って存在する。

14 高いレベルの成功を達成する身体的活動におけるよいパフォーマーである青少年から、ほとんど成功しない最も有能でないパフォーマーまでの連続体

娘は学校でプレーしていて、とてもうまくなりました。地元のいろんなチームのオールラウンドプレーヤーだったんですが、今はもっと大きいクラブでプレーしています。他のチームから次のシーズンにプレーしてほしいと誘いが来ていますが、あの子はおそらく行くと思います。(父 - 14 歳女子)

1 つの状況(学校での体育など)以外の機会を得ることにより、より高い水準のパフォーマンスと競争を経験したいという当初の願望を永続させる活動に関わ

るさらなる機会が作られる。連続体のもう一方の端には、この状況に不満をもっている青少年がいる。その青少年とその親は、健康上の利益ではなく「管理プロセス」のために、身体的活動の重要性を認めている可能性がある。つまり、好ましい活動に関わっていると、トラブルを起こしたり危険な目にあったりしないということである。その結果、彼らは、青少年が成功するよりよいチャンスの他に同じ管理プロセスを促進できるように、体育で経験した比較的否定的なきっかけの代わりとなる活動を求める可能性がある。

娘が学校の活動以外に何か参加するとすれば、体育とは直接関係のないものになるでしょう。演劇とか料理みたいなもの。身体的なものよりも、そのような活動に加わるでしょう。(父 - 13 歳女子)

上記で論じた成功の連続体での位置に関係なく、組織化と親、学校、青少年の関わりはきわめて大きく、彼らの選んだ身体的活動への長期の参加を検討する際に過小評価できない。

楽しさ

ゴールに近づいてきてもうすぐ終わるときとか、プロットが特におもしろいときとか、わくわくします。何かおかしなことが起こったときもとても楽しいです。終わることが目的ではないから。それも目的なんだろうけど、楽しむことが本当の目的です。ただそれをするのがいいことなんです。いろんな気持ちが混ざり合って、それがよくなっていくんです。(14 歳男子)

「楽しさ」¹⁵ は、青少年にとって定義するのが驚くほど難しい概念である。これは一部には、Goudas と Biddle (1993 年) が述べたように、「身体的活動における喜びは、複数の決定要因をもつ幅広い概念である」からである。しかし、楽しさは、図 1 で示すように、青少年の「報酬の正当化」プロセスにおける「社会的プロセス」と「パフォーマンス (および能力)」に含まれる主に「さりげない」性質か「まじめ」な性質のどちらかとして存在する。青少年が作り上げる「共通の経験」により構成される「楽しさ」の「さりげない」要素と、「娯乐的」なパフォーマンスタイプの活動に関わることの性質との関係を図 6.6 に示す。このような活動は、青少年が何か新しいことを学びながら幅広い範囲の選択を行うため、彼らにとっては偏った判断がなく、威嚇的でないことが最も重要である。一方、主に「まじめ」な性質をもつ完全に異なる「楽しさ」の概念は、青少年が関わっている「まじめ」なパフォーマンスタイプの活動に関連している。この活動は活動における青少年のパフォーマンス (身体的および感情的) に関して仲間や監視人をきわめて批判的にさせ、はるかに厳しい選択の限界内に存在する。この建設的な批判は、青少年の高いレベルの内因性モチベーションにより抑制される。

15 青少年は「楽しさ」を「喜び」という言葉と同義であると考えていて、明らかにこの2つを区別することができない。

青少年が「まじめ」なパフォーマンス活動に参加する仲間（彼らとの接触はこの状況に限定される）とともに作り上げる「共通の経験」と「二次的」友情は、「まじめ」なパフォーマンスタイプの活動によって発生する「楽しさ」の「まじめ」な概念を強化する。しかし、主としてまじめな「楽しさ」の状況で築かれる「二次的友情」が「一次的友情」になり、「さりげない楽しさ」の状況として解釈されるとき、逆のことが起こる。身体的活動において楽しむことは、青少年がその活動に継続的に関わることの不可欠な要素として頻繁に文献に引用されており（Weiss, 1993）、楽しさの性質がさりげないかまじめかに関係なく、青少年と背景の間に発生する基本的な相互作用がある。身体的活動は、相互作用を高めて、青少年がその社会的状況を拒否したり脱退したりするのを防ぐことに役立つ社会的活動になる。Weiss（1993年）は、青少年がある種の身体的活動への参加を開始して継続するためのモチベーションに貢献するものとしてスキルの習得、能力の認識、および協力的な社会の影響を強調するとき、「社会的プロセス」と「パフォーマンスおよび能力」を強化している。「社会的プロセス」と「パフォーマンス（および能力）」は分離すべきではない。これらは、青少年のための「報酬の正当化」において完全に独立した要素ではない。これらの基本的な側面の間には多くの相互作用と相互関係があり、その重要性と支配力は、青少年の特定の状況と他の「監視プロセス」の影響によって決定される。

結論

青少年が身体的活動を採用するつもりならば、彼らの参加が不可欠である。しかし、これは一部には「報酬の正当化」プロセスの影響を受けている。つまり、青少年の活動の解釈に関連する活動の認識は、彼らがその活動から何かを得たがっているということである。これを考慮に入れると、身体的活動で競争を示して使用する方法にはまじめな意味合いがある。活動が青少年の感情的解釈に合うように、その活動に参加する青少年の認識と願望を考慮に入れる必要がある。競争は本来間違っただけではおらず、ある特定の状況での競争の扱い方が間違っているのである。競争は、青少年の弱点を自分自身および彼らが進んで共有したがる人々以外の誰にも強調することなく、学びの環境の中で彼らに挑む形で行われるべきである。そうすることにより、彼らは身体的活動への参加を維持する。楽しさと喜びは、青少年の参加レベルを最大限にする。青少年は、威嚇的でない方法で実験し練習する時間がもてる状況が与えられた身体的活動に参加する。このような状況では、彼らはどんなパフォーマンスや身体的発達により感情的に抑制する結果も克服できる。したがって、彼らは身体的活動に対する肯定的な見方を維持することができ、そうすることにより身体的活動に参加する可能性が増す。しかし、これらのすべての提案の基盤となるものは、ここ

で問題にしている身体的活動というよりもスポーツに親しむことである。いや、そうではない。重要なのは身体的活動であり、その要素が偶然にもスポーツであるという考えを促進する必要がある。そうすることにより、現在多くの人々に身体的活動を受け入れがたいものになっているスポーツに関連して認識された否定的な側面を取り除くことができる。

参考文献

Brustad, R. J. (1992). Integrating Socialisation Influences into the Study of Children's Motivation in Sport. Journal of Sport and Exercise Psychology, 14, 59-77.

Goudas, M., & Biddle, S. (1993). Pupil Perceptions of Enjoyment in Physical Education. Physical Education Review, 16(12), 145-150.

Jambor, E. A., & Rudisill, M. E. (1992). The Relationship Between Children's Locus of Control and Sport Choices. Journal of Human Movement Studies, 22, 35-48.

Nicholls, J. (1984). Achievement Motivation: Concepts of Ability, Subjective Experience, Task Choice, and Performance. Psychological Review, 91, 328-346.

Roberts, K. (1993). Young People and Football in Liverpool. In Leisure in Different Worlds. Third International Conference of the Leisure Studies Association, Loughborough University.

Strauss, A., & Corbin, J. (1990). Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques. Newbury Park: Sage.

Waring, M. (2001) Grounded Theory: A Framework for Enquiry. Paper presented at the British Educational Research Association Conference, Leeds University, UK, 13-15 September.

Waring, M. (2003) The Helix Model: An Interpretation of Grounded Theory. Proceedings Hawaiian International Conference on Education. Honolulu, Hawaii, USA, 6-10 January.

Weiss, M. R. (1994). Symposium: Children's Participation in Physical Activity: Psychosocial Perspectives. Research Quarterly for Exercise and Sport

Supplement(March), A84.

講演会のお知らせ

アラン・ベアナー教授講演会

アラン・ベアナー(Alan Bairner)教授は現在イギリス・ラフバラ大学のスポーツ学部でスポーツ社会学、特にナショナリズムやグローバリゼーションを研究する第一人者です。日本でも知名度が高く、著書、論文を読まれている方も多いことと存じます。この度一橋大学の招聘で3月下旬に来校します。当初、金

沢での日本スポーツ社会学会にもご案内しようと計画していたのですが、招聘基金の性格上それは不可能となりました。従って、関心のお有りの人には広く門戸を開いて、講演会にご案内することになりました。講演は導入 と専門 と、2回に渡って行うことになりました。時間の関係上、通訳は付けません。ゆっくりと講演して貰う予定です。しかし、どうしても苦手に人には臨機応変に対応します。じっくりと議論のできる場に、今後の日本のスポーツナショナリズム、グローバルゼーション研究の1つの契機としたいと考えています。ご遠慮なくご参加下さい。

尚、会場整備の都合もありますので、ご参加頂ける方は、下記の内海までメールでお知らせ下さい。

日時： 2007年3月28日(水) 4～7時
2007年3月29日(木) 2～5時

場所：一橋大学 特別応接室(本館正面玄関入りすぐ右の部屋)

内容： Sport, Nationalism and Globalization: relevance, impact, consequences
National Sports and National Landscape: real and imagined

言語：英語(通訳無し。ゆっくりと話して貰います。)

費用：無料

* 尚、今回は懇親会はありません。

* ご参加頂ける方は、下記のメールにご連絡下さい。

一橋大学社会学研究科 内海和雄
Office cj00233@srv.cc.hit-u.ac.jp
Home uchiumi_kazuo@ybb.ne.jp

編集後記

45号の会報をお送りいたします。この会報発行の御知らせが回っている頃には、金沢での第16回学会大会が開催されていると思います。今大会は、海外からの一般発表が多い点等、いくつかの特徴ある大会です。多くの会員のみなさまとお会いできることを願っております。

また今号を最後に、次号から会報の編集体制が変わります。ここまで、いろいろな形でお力添えいただきました会員のみなさまにお礼を申し上げますと

もに、特に会報の発行がどうしても遅れ気味になり、会員みなさまにご迷惑おかけいたしましたことを、ここで改めてお詫び申し上げます。電子媒体としての会報のあり方について、今後とも考えていかなければならないことが多くあるように感じます。多くのみなさまのご意見を、また広報委員会の方へお寄せいただきますようお願い申し上げます。(K・M)

学会への連絡、入退会、住所・所属・メール等の変更、会費納入、その他の各種手続き

〒151-8523 東京都渋谷区代々木3-22-1 文化女子大学気付

日本スポーツ社会学会事務局

萩原美代子【事務局長】

TEL: 03-3375-7577

FAX: 03-3375-7577

E-mail: secretary@jsss.jp

会報への投稿

〒184-8501 東京都小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学教育学部

松田恵示【会報担当】

E-mail: doc@jsss.jp

学会公式ホームページ

日本スポーツ社会学会公式ホームページ

<http://jsss.jp/>